

## 第 7 回エリア会議での主な意見

### ● はじめに

- ・ 洋光台の取り組みは我が国の団地再生の一つのモデル。新しい団地再生の姿を見せていきたい。一方で次の展望をどう見せられるか、重要な時期に来ている。(小林先生)

### ● アンケート分析に関して

[説明]

- ・ 分析結果は以下の 3 点
  - (1) 暮らしの満足度の評価に、A「安心・安全環境」からFの「コミュニティ環境」までのどの項目が重視されているのか、重回帰分析を行った。最も効いているのは「賑わい・利便性」。一方、「高齢者の環境」は比較的影響が小さかった。
  - (2) 洋光台地区の居住安定性・定住環境(暮らしやすさ)の評価の新たな視点として、主成分分析により「総合的な暮らしやすさ」と「人とのつながり」の 2 視点を導く
  - (3) 「総合的な暮らしやすさ」「人とのつながり」は、明確にどちらかを重視する傾向ではないが、「60 才以上高齢者」「2・3・5 丁目」「自営業」の方に、「つながり重視」傾向が強かった。

[意見]

- ・ 「賑わい・利便性」が満足度に効いているのは意外な結果だった。また高齢者の評価が低いことにも留意が必要だろう。
- ・ 2・5 丁目は団地が多く、3 丁目は駅前があって商店・団地・戸建てが混在する地区。「人とのつながり重視」が多いのはうなずける。

### ● シェアリングシステムに関して

[説明]

- ・ カーシェアは「日産リーフ 2 台を無償提供」「ちよいモビ 5 台を無償提供」「車両 2 台を購入」の 3 つの方法を提案・検討。
- ・ シェアサイクルは横国大で実験中の「COGOO」をベースに提案

[意見]

- ・ 洋光台では、運動能力の衰えた高齢者の移動支援が課題として大きく、ニーズもある。車も自転車も運転が出来ない高齢者の送迎サービスはできないか。
- ・ 他地区で、運転者はボランティア、草刈り等で収入を得て運営費に充てるなどで自立的な移動サービス提供の事業を実験中。車と運転者、サービスを受けたいという人のマッチングは今の技術で可能だが、高齢者にスマホを使ってもらう前提で、あまり現実

的でない。事業として行うには、運輸と福祉の連携、運転ボランティアの活用などが必要だろう。(中村先生)

- ・ 現在、駅前の駐輪場は 200 台待機者がいるが、駐輪場ばかり増えても仕方が無い。シェアサイクルが出来るのなら、実験的に、少ない台数でも、すぐにでも始めたい。
- ・ まず駐輪場利用者がどういう人か、どこから来て、何時から何時まで留めているのか、詳しい調査が必要。実験的に小さく始めるのもいいが、ある程度の規模でやらないと実験の意味がなくなる。(中村先生)

## ● 平成 26 年度の活動状況について

[意見]

- ・ CC ラボでの活動内容の詳細や、ラウンドテーブルで出た意見などを、もっと発信できないか。どういう団体が、どういう考えで、どういう活動をしているのか。
- ・ UR の HP だけでなく、洋光台住民作成の HP 「Lovely 洋光台」などとも連携しては。
- ・ 駅を降りて出てきた場所でのパッと人目につくような PRに力を入れると効果的だろう。
- ・ CC ラボなどこれまでの様々な取り組みの効果検証はどう考えているか。
  
- ・ 団体と活動内容の紹介や、ラウンドテーブル、CCC 等は、少しまとまった段階で、例えば3 月くらいに披露してはどうかと考えている。(UR)
- ・ 1 年間で効果検証は難しい。もう少し長い目でみたい。(UR)
- ・ ここ一年間で、2 つの大きな効果を感じられた。(1) いろいろな活動団体が結びつく効果 (2) 今までなかなかカラーが出せなかった団体が、CC ラボによって活性化
- ・ ハロウィンが例年になく盛り上がったのは、UR が絡んだおかげ
- ・ いろいろな力が地域にあることが見えてきたことをまず評価したい。ラウンドテーブル、CCC の展開や出てきた意見は是非聞きたい。(大江先生)

## ● 今後に向けて

[意見]

- ・ 地域の核である子ども科学館、ケアプラザとの連携ができてるのは財産。また若者など次世代の担い手とも、現在進みつつある南陵高校や慶應加藤研など、はっきりした主体をつかまえて、テーマごとにつないでいくといい。(小林先生)
- ・ CC ラボができたことで、新たな活動が生まれ、今までのしくみ・役割の中では見えなかったいろいろなニーズが見えてくる。UR も、商店街も、行政も、ここへくれば「何らかの気付き」を得ることができ、それは本来的な「インキュベーション」機能であり、非常に重要なこと。
- ・ 課題がいろいろある中、「広報」は結構難しい。「まちの事務局」でも広報のスキルを持った人がいると、いろいろな媒体を活用しながら、より気付きが得やすく、事務局の実

体もでてくる。

- 民間の事業ベースでは困難なものを、皆で少しずつ負担して、地域の NPO 等が取り組む「BID」のような取り組みができるよい。
- 青葉台アートプロジェクトのような、やること自体が楽しめて、それを媒介に人がつながりながら、一部はビジネスになるような「何か」を皆で見つけていく。(大江先生)
- まちの事務局を実際に立ち上げて機能させるにはさまざま課題がある。例えば CC ラボを拠点にするとそこにいつも誰かが常駐していないといけないし、カーシェアをするならその窓口的機能も欲しい。(小林先生)
- カーシェアは車の機能だけではなく、地域で運営することでつながりができ、付合が増えることで有事の際の防災活動にも役立ち、見守りにもなるという副次的効果がある。これら副次的な相乗効果を評価できるとよい。(中村先生)
- 一方で、住民ベースで行うとトラブル対応が難しい側面もある。既にビジネスベースに乗っているものとうまく連携協力する道をさがすことも重要では。(大江先生)
- 業者と地域が混ざり合いながら、最初は 9 : 1 だったものが最後は 2 : 8 くらいまでになるようなストーリーを目指す。業者のサポートも、地域の力も両方必要。(中村先生)
- まちの事務局の設置、継続的な CC ラボ運営等を展開するためには、ビジネス的感覚や仕組みを導入しないと不可欠。全部を住民だけで行うことは出来ない。様々な組み合わせを考え、どうつくり出して、全体としてまちの事務局が運営できるような体制を考えないと、継続的な活動にならない。来年度いっぱい、このテーマで議論をしていきたい。  
(小林先生)

以上